



宝物のいっば
いあつたころ

yae-mon

宝物のいっぱいあったころ

思い出をたどる人へ
僕は君を知っている

草むらを踏み

土の匂いにまろんだ君

僕は土の感触を通して

おさなき日の君を知る

ここに書くのは

少し古いことかも知れない

だが同じ 輝く太陽を

そのじりじりする熱さを

多少は理解できた者として

僕も語りたい

僕は神戸の下町育ち
物心ついたとき

僕は歌っていた

ラジオから聞きおぼえた

アイバンホーの歌

長屋のレンガ小路が交わるころ

手押しポンプ井戸があって

その横の水そうのへりの上で

綱渡りしながら

大声で歌った

近所の子とやった最初の遊び

それはメンコ

ぱちんと相手を裏返せば

僕のものになった

誰がはやらせたか知れないが

見つければ先生に叩かれた

それでも少ないメンコを

スリルしながら

努力してたくさんにした

そんなある日 6つ7つ先輩が

もう要らんからと ブリキ缶

いっぱいメンコをくれた

先輩は中学を卒業して
親の仕事を継ぐらしかった

大人に脱皮する悩みを知らず

僕は遺産相続されたように

すごく裕福な気になった

だがある日、学校から帰ると

宝は宝箱もろとも消えていた

ばくちはダメ 捨てたと母の声

それ以来メンコはやめた

家が狭くて宝が隠せない

それもあったが もののはかなさと

ものを見る目を一つ持ったのだ

ザリガニを捕りに行った

小四の夏休みの

ガキばかりでの行軍

ガキ大将は同学年のやつ

あとはみな小さいのばかり五人

男ばかりで意見が一致

よーし こんどは遠いぞ

覚悟してついてこいとガキ大将

手に虫網 ある者は金バケツ

素足に運動靴でくり出した

初めは町中 もの珍しそうに
きょろきょろしながら

遊びの話しをしたり

いない友の悪口を言ったり

ピント外れのHな話しをしたり

1時間も経つと

コンクリートの道が終わって

砂利道になった

ひゅっと風が吹くと

白い砂ぼこりが舞った

運動靴のゴム底を通して
石ころがごつごつする

車のほとんど通らない道

角をはやした黒牛が悠々

手ぬぐいで頬っかむりした

キセルのオッチャンと連れだって

大八車を引いていた

もうしんどいよ

のどがかわいた

まだなんか

もうちょっとや

がんばれとガキ大将

大将も先輩にこんな風に

連れていかれたんだろう

大将は右手にある田んぼに寄り道
みんなで小便してから溝を指す

前にここでドジョウを捕ったんや

そこでみんなで大搜索

水は冷たくおどっていたが

ドジョウはからぶった

ハングリー精神はかき立てられ

目指す峠の下の大ため池に着く

大将が先導して縁まで行けば

何の囲いも 立て札もなく

あるがままの濁り池が草の中

ぎこちなく足下を確かめながら

僕らは虫網と五体を駆使して
泥まみれになって

ザリガニを捕った

どこまでが冒険であり

どこまでが危険であるか

知ることができたあの夏の頃

思えばメンコも虫網も
レンガ小路の駄菓子屋から

未知のお菓子であふれた

難攻不落の宝の山

こづかい少ない僕らにすれば

2円で1個のいなかあめ

5円で1回の舐めくじ引き

当たったことなくラムネ菓子

少したまればオッチャンが

よしずの中で作るたこ焼きを

オバちゃんの話聞きながら

すわって出汁で食べたっけ

せまいレンガ小路は
白墨一つで広がる世界

けんけんぱ すもう

ルールは先輩が残して

僕らが発展させた

新しい遊びを作る名人たち

気のきいた公園はなくとも

どこもかしこも遊び場だらけ

危ないよと言うおばさんは居ても

誰見とがめることない自由な時代

土や人や様々な宝物に囲まれた

太陽が顔を照らした懐かしい頃

(了)

宝物のいっぱいあったころ

<http://p.booklog.jp/book/115291>

著者 : yae-mon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yae-mon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/115291>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト